

C-6 住まいに関する研究 (第2報)

—寝かたについて—

東筑紫短大 ○有賀 明子
福岡学芸大 秋山 晴子

1. 目的：住生活を考える場合プライバシーの問題は、非常に重要であるといわれる。1日の労働の疲れを私室にとじこめることによっていやし、次に来るべき労働の再生産のエネルギーを貯えるとか、夫婦生活、個人の生活の幸福のためには、私室は不可欠のものである、という様にこの問題は現在非常にクローズアップされている。

たしかに家長を頂点とした縦の関係で形成されていた、過去の日本の家庭においては、これ程迄にプライバシーの問題は問題とされていなかった。いうまでもなく、それは個人というよりは、むしろ家を単位とした生活にその原因があったわけであるが、終戦後アメリカ的個人の尊厳の風潮が輸入されるにおよび、家族集団というよりも個人を主張することが強くなった。その結果住要求としてのプライバシーの問題が現出てきたものであろう。しかしながらその様な要求実現を阻害する要因の存在は多様である。経済的な要因といった様な外的な要因が勿論存在するわけだが新しい変化に抵抗し、古いものに執着しようとする人間固有の内的なものも無視出来ない。今回は特にその内的要因についてみることにする。

2. 方法：a 対象＝北九州市および田川近辺および大分県の一部より無作為に抽出した113世帯を対象とした。
b 期間＝昭和39年1月～3月。c 方法＝質問紙記入によるもの。

3. 成果：現在整理中につき大会にて発表する。